



十番目の打席に

* 1 回表 *

夏の空に一本の飛行機雲が線を描いた。

『第93回 全国高校野球選手権 地区大会』

白い文字で描かれた横断幕が風にはためいた。

真っ白に洗いあがった公式試合専用のユニフォーム。

たった10人だけの野球部。

その最後尾で、少しでも右斜めに傾いた背番号10。

田中慎二の高校最後の夏が幕をあげた。

-

-

<打順表>

- 1 中 佐藤幸生
- 2 二 山田小次郎
- 3 三 二宮恵吾
- 4 左 栗本和則
- 5 一 園田尚久
- 6 右 山下信吾
- 7 投 工藤透
- 8 捕 宮本浩太
- 9 遊 木村謙次郎

補欠 田中慎二

つづく

* 1 回裏 *

「甲子園、行けたらどうする？」

二宮恵吾は慎二に話しかけた。

公式戦まであと1週間。

最後の練習試合。

ネクストバッターズサークルに向かう直前、恵吾は穴の開いた革の手袋を左手に被せながら言った。

「甲子園、行けたらどうする？」

「うん。3塁側でいいよ」

さらっと言い放つ慎二に、

「阪神戦じゃねえよ、バカ」

慎二は眼鏡を左手で正すと、冷静な声で言った。

「初球、カーブ」

「絶対？」

「うちの3番なら打てるよ」

慎二は恵吾を見上げた。

恵吾はニヤリと笑って言った。

「見てろ、最強のスコアラー」

その瞬間主審が四球を告げ、2番打者の山田小次郎がバットを静かに置き一塁へ歩いた。

慎二は握ったシャープペンシルを指先でくるくると回しながら初球を待った。

相手投手がセットポジションから、投げた。

バットの金属音が響いて、白球が空高く放物線を描いた。

つづく

* 2 回表 *

「来た球、打っただけだよ」

栗本和則は帰りのバスの中でおにぎりを頬張りながら言った。

「さすが4番」

佐藤幸生は冗談っぽく、恵吾の顔を見ながら笑った。

「うるせえよ」

恵吾は口を尖らせて、窓の外に目をやった。

赤信号で止まったバスの窓の外は動いてすらくれない。

慎二は幸生に「スコアブック見せて」と言われ、カバンに仕舞っていたスコアブックを差し出した。

スコアブックに記された3番二宮恵吾、三振の印。＜K＞

その次につづく4番栗本和則のホームランの印。＜◇＞

栗本は引き続きおにぎりを頬張りながら言った。

「でも、恵吾のあのファールは惜しかったよね」

恵吾は呟くように言った。

「ファールじゃ意味ねえんだよ」

栗本は「うん、シーチキンマヨだよ」とおっとり言った。

慎二は恵吾の隣で言った。

「でもさ、あのカーブ流してライトに持っていったのはさすがだよ」

恵吾は帽子を深く被って眠る体勢を整えた。

「やっぱ、栗本みてえにさ、真直ぐをバックスクリーンまで持っていきよ、慎二がスコアつけてくれてんだからさ」

つづく

* 2 回裏 *

バスが止まり、10人が重い荷物を背負って降りてくる。

「とりあえず、荷物出したら集合！」

主将の山下信吾が全員に声を投げた。

バスのトランクから荷物を引っ張り出してその荷物を囲むように全員で円をつくった。

山下が言った。

「今日で、練習試合終了。

明日、月曜日は自主練ね。軽くにしといてとりあえず疲れをとろう。

これ、約束。いいね？透？」

山下に名指しで指摘された投手の工藤透は「ほーい」と軽くいつもどおりの返事を返した。

「火曜日はバッティング中心のメニューにしようか？」

山下は慎二の顔を見た。

慎二は言った。

「火曜日は守備の連係を再確認したほうがいいと思う」

全員が慎二の顔を見た。

栗本がスコアブックに記された今日の試合のページを開いた。

慎二は続ける。

「僕が思ったのは、バッティングはみんないいと思う。

今日のイメージを持っててもらいたいくらい。

だけど、守備の連係をもう一回ゆっくりおさらいしたほうがいいと思う」

その言葉に捕手の宮本浩太が頷いて「やっぱり投げノックだね」と言った。

山下は言った。

「じゃあ、火曜日は連携。全員守備ついて投げノックやろう」

その言葉に全員が頷いた。

『投げノック』とは先輩が抜け9人になった昨年の夏、全員で考えたオリジナルの練習だった。

全員の守備練習。試合の状況を設定して、捕手の宮本が打球代わりに投げる。

今日まで何度も繰り返してきた。

だからこそ。

全員がそう思っていた。

バスのエンジン音が去って、カラスが鳴いた。

「じゃあ、以上！解散！」

山下の声に全員が声をそろえた。

「ハイッ！」

つづく

* 3 回表 *

月曜日の昼休みになって、唯一の2年生、木村謙次郎が慎二のクラスを尋ねてきた。

「先輩、」

小柄な木村は背伸びをしながら窓際の席の慎二を呼んだ。

「どうしたの？」

「ちょっと、いいっすか？」

二人は廊下を歩いて、渡り廊下に出た。

体育館と繋がる3階の渡り廊下は人の通りが少ない。

「俺、どうしたらいいんっすかね？」

「なにを？」

「秋、」

「あき？」

「俺、ひとりになっちゃうじゃないっすか？やっぱりダメなんすかね？」

上目遣いで泣きそうな目をして言う。

「野球、やりたい？」

黙って頷いた。

「でも……、人数足りないっす。それに俺じゃなんもできねえっすから」

慎二は言った。

「キムはさ、」

「はい？」

「2年生？」

「なんなんすか？いまさら？」

「気持ちも2年生？」

「どういう意味っすか？」

「ぶっちゃけ、俺ら3年も全員まだ2年生なんだわ。見ててわかる。俺、見てるからわかる。

ずっと、2年生してたんだよ」

「ずっと？」

「そ、ずっと。

去年の今頃、先輩が抜けて、あと1年。

がんばって夏の大会までに俺らのチームつくるぞ！って。

あの時期。」

「でも、俺にとっても最後の大会なんっす……今のままじゃ」

木村の泣きそうな目が潤み始めていた。

慎二が木村の頭を撫でた。

「キム、お願いがあるんだ」

「なんっすか？」

「一緒に最後の夏にしよう」

「どういう意味っすか？」

「無理してさ、無理やりチームつくろうとか、

つくらなきゃとか考えて欲しくないんだよ。

キムが野球好きなのもわかるし、だけど、苦しすぎるから、ひとりからチームつくるとか」
木村が俯いた。

渡り廊下のコンクリートの灰色が、ポツリポツリとその色を一雫ずつ濃い灰色に染まっていく。

「俺マネージャーやってて、山下がさ、泣きながら練習メニュー作ってたの知ってるから」

その言葉を聴いて、木村は静かに頷いた。

「山下には言った？」

首を横に振って、鼻頭を半そでで拭って、木村は「山さんには言ってません」と呟くように言った。

「だから、ちょっと考えます」

そう言うと顔をあげて、

「先輩、今日、帰り、キャッチボールの相手してください」

そう言った。

慎二はポケットに入っていたポケットティッシュを差し出した。

木村は「ずびばぜん（すみません）」と言って素直に受け取った。

つづく

* 3 回裏 *

昼休憩の終わり。

チャイムが鳴って慎二は教室に帰った。

席に着くと、隣に座った工藤透が話かけてきた。

てっきり木村のことかと思った慎二は「なんでもないよ」という言葉を用意していた。

――が、

「2回と8回さ、俺、フォーム変じゃなかった？」

不意を突かれたような気分になって、「え？」とだけ言うと。

「2回と、8回」

透は自分を指差して、「フォーム」とだけ言った。

慎二は思い出して言った。

「グローブ。あれ、わざとじゃないの？」

そう言って記憶の中でもう一度VTRの再生ボタンを押した。

「格好よくないかな、あれ？」

「ああ、だから4番だけ変えたの？」

「うん、それ」

慎二はスコアブックに並んだファールの印を思い出した。

相手の4番が首をかしげながら、打席に入るのを思い出していた。

「あいつファールばかり」

慎二がそう言うと、透は「おもしろかった、あれ」と言って笑った。

「あんなに無駄球投げんなって言ったのに」

「わりい」

透はそう言って笑った。

「でもさ、手ごたえあったんだろ？」

透は頷いた。

話はそこまでだった。

ふわふわとした透。不可解な透の思考。

慎二はただうらやましかった。

自分には無いその天性の素質。

――もう少し。

そう思ってやめた。

――適材適所。

その言葉を頭の中でひとり繰り返した。

自分の存在理由を教えてくれた9人の仲間。

運動オンチを嘆くだけだった自分に、居場所を与えてくれた仲間たち。

そして、透の言葉。

今でも思い出す。

「慎ちゃんくらいだよ」

その言葉が記憶と現実とでハウリングした。

「右隣を振り返る」

透は言った。

「慎ちゃんくらいだよ、あんなわずかな違い、ちゃんと覚えててくれるの」

透は慎二の顔も見ずに、だけど、嬉しそうに笑った。

それからひとつ古典の教科書をぱらぱらとめくりながら呟いた。

「あ、蒸しパン食いてえな」

つづく

＊ 4 回表 ＊

放課後慎二がいつもどおりウォーターポットに麦茶を用意していると、佐藤幸生が体操着のシャツに下半身だけ野球のユニフォームで現れた。

慎二は言った。

「なんで上だけ？」

「俺のポリシー」

幸生はポンッと左胸に刺繍された『佐藤』の苗字を叩いた。

「ありふれた苗字だな」

「鈴木に失礼だ」

幸生はそういいながら、カバンからスパイクだけ取り出すと慎二に見せた。

「なに？」

「よく見てみ？」

見せられたスパイクの、その細い紐の先に、桃色で『藤』『佐』と刺繍してあった。

「ありふれた苗字だな」

「鈴木に失礼だ」

そう言いながら、「見てみ？」と呟いて、左足にそのスパイクを履き始める。

紐の先がぐるりと円を描いて、ちょうちょのカタチを結んだ。

幸生はニタリと笑って、「どうよ」と言った。

さっきと左右が逆になって、ちょうど読めるように、

『佐』『藤』

に並んだ。

「芸が細かいよ」

「明日には、右足の分もやるつもり」

「また、佐藤？」

慎二が尋ねると、幸生はニタリと微笑んで、

「いや、鈴木でいこうかと思う」

慎二は間髪いれずに言った。

「鈴木に失礼だ」

幸生も笑った。

つづく

* 4 回裏 *

慎二はふと立ち止まって、グラウンドを見つめた。

全員が思い思いの練習をしている。

昨日の試合を振り返りながら、オーダー表の順番で仲間を探す。

1 番センター 佐藤幸生。

1 塁と 2 塁のベースを何度も走り続ける。盗塁の練習。

2 番セカンド 山田小次郎。

ホームベース付近でバントの構えをする。

3 番サード 二宮恵吾。

ピッチャーマウンド付近で、打撃マシンにボールを入れる。

山田のバント練習につきあっている。

たぶんこのあと、バックネット付近でティー打撃。

おなじみの光景。

4 番レフト 栗本和則。

バックネット横にあるティー打撃用のネットでスイング中。

5 番ファースト 園田尚。

ティー打撃の栗本にボールを投げる係。

さっきまで打っていたから、首から提げたタオルで何度も汗を拭いている。

6 番ライト 山下信吾。

素振り中。手を止めて、あたりを見回す。

このあと栗本あたりにティー打撃を変わってもらうのだろう。

目があった。頷いてニヤリと笑う。

全員が何を考えているのか、全員が何をすべきなのか分かっているのがうれしい。

こういう瞬間に、きっと、キャプテンをやってよかったと思っているのかもしれない。

7 番投手 工藤透

ブルペンでキャッチボール。

相手はもちろん、

8 番捕手 宮本浩太。

そうこうしていたら、山下が走って慎二のところまで来た。

「なあ、慎二、キム知らない？」

キムこと、9番ショートストップ木村謙次郎。

「あ、わかんない」

ふと見上げた2年5組の教室。

窓からぼーっとグラウンドを眺めている姿があった。

慎二の視線の先を追って、山下が木村の姿を捉えた。

「なんかあった？」

「2年生だから」

「あー、そか」

山下は頷いて、麦茶に手を伸ばす。

慎二は言った。

「あ、でもキャッチボールする約束したから、出てくると思うよ」

山下は冷たさにしびれる眉間を押さえながら言った。

「あ、それならOK」

「冷たすぎた？」」

慎二のその問いに、山下は、

「激しくひでえ」

そう言って笑った。

「キャッチボールさ、」

山下はコップを置きながら、

「俺もまぜてや」

「俺はいいけど……」

慎二は木村の姿をもう一度見つめた。

山下はその視線の先を追う事はせずに、「本人次第だな」と呟くように言った。

つづく

＊ 5 回表 ＊

一定のリズムを刻むバットとボールの音。

一定のリズムを刻むマウンドからのキャッチボールの音。

一定のリズムを刻む二塁ベースでのスライディングの音。

聴きなれた音が、聴きなれた分だけ、聴きなれたリズムで繰り返す。

最後の1週間が少しずつ終わっていく。

その夏が終わっていく瞬間を、ただ座って眺めていた。

慎二は足音が近づいてくるのに気が付かなかった。

「先輩」

真っ赤な目をして、だけど、木村はちゃんと慎二の前に立って言った。

「俺も、3年生します」

それを言い終わったのと同時に木村は笑顔をつくった。

だけど、同時に左目から、我慢していた涙が一筋こぼれた。

慎二は首に掛けていたタオルを木村に手渡した。

木村は顔を覆って、声も無く泣いた。

「座れよ」

慎二は言った。

その言葉に木村は小柄な身体を、いっそう小さく体育座りにした。

「おちついたら、麦茶飲んで、キャッチボールするか？」

木村はタオルに顔をうずめたままで頷いた。

しばらく経ったあと、学校のチャイムが鳴った。

それに呼応するように、木村が水道まで走っていった。

無駄に思えるくらいの水量をだして、

勢い任せに顔を洗った。

目とか鼻とか口とか全部取れて流れるんじゃないかと心配になりそうなくらいの勢いで、顔を洗っていた。

慎二はその作業を終わりまで見つめていた。

蛇口が流した水の分だけ、いや、それ以上に木村は悲しかったんだと思った。

一杯の麦茶をコップに注いで、木村の傍に行ってやった。

蛇口から水が止まる。

木村が顔を上げた。

真っ赤になったその顔で、木村は笑った。

今度は涙が流れなかった。

木村は差し出された麦茶を一気に飲み干した。

晴れやかな顔になって、だけど、眉間を押さえてうずくまった。

「どう？今日のはわりと冷えてるっしょ？」

泣きそうな声で木村は言った。

「先輩、激しくヤバイっす」

つづく

* 5 回裏 *

2年生の夏。

先輩のいたチームが終わって、選手がたった8人だけの野球部になった。

「なにやんの？ たった8人で？」

今までの人数でできていた練習が、当然のようにできなくなった。

ノックを打つ人もいなければ、打撃練習も1箇所だけになった。

時々先輩が放課後手伝いに来てくれる。

けれどそれも冬を近くして徐々に減っていった。

「ごめんけど、俺、ちょっと休むわ」

練習熱心だった山田が、練習に来なかった。

慎二は何もできなかった。

宮本が練習中にうずくまった。怪我。数日間休むことになった。

ひとりひとりの心が離れていった。

――あと1年しかないのに。

放課後、慎二はふと足を止めた。

山下が、夏休みの教室に一人残って、机に向かってなにかを書いていた。

「だめだ」

レポート用紙を一枚ちぎって、黒板の方に向かって投げる。

力なく落ちる紙くず。

慎二は考える間も無くそのしわくちゃになったレポート用紙を広げた。

練習メニューがいくつも書かれ、そして斜線を引いて消されていた。

「――慎二か。だめだな、俺、なんにもできやしねえ」

そう言った山下は、頭を抱えたまま、泣いていた。

今まで先輩に教えてもらって、自分たちでもこなしてきた練習。

その練習メニューに赤色のボールペンで横に引かれた線。

新しいメニューを必死で考えようともがいた山下の残した、

けれど握りつぶすようにゴミ箱に捨てられた紙の山。

「山下、」

そのタイミングで3年の学年主任の教師が来る。

「山下、来年の春の時点で、人数増えなかったら、廃部な。

お前らも受験あんだから遊んでないで勉強しとけ、な」

最低のタイミングだった。

廃部は決定的だった。

* 6 回表 *

8月。

慎二のもとに山田から電話があった。

「転校生。野球部希望。これでOKでしょ？」

「どういうこと？」

慎二の問いに、山田が応える。

「従兄弟」

「いどこ？」

山田は笑って言った。

「お盆にさ、休みもらったっしょ？」

そしたら、野球部強いらしくて、従兄弟万年補欠以下らしいんだわ。

今転校してきたら、レギュラーだぞって言ったら、来るって。

2学期からOKみたいな話になったって、今日親が言った」

「でも、まだ9人だよな？」

そう言った慎二に、山田は間髪いれずに言った。

「いいじゃん、選手登録で」

「俺が？」

「ほかに誰がいるんだよ」

山田は笑った。そして続けた。

「おもしろい練習メニュー教えてもらったよ」

「誰から？」

山田は言った。

「いや、その従兄弟とか、親戚のおっちゃんたち」

嬉しい報せに思考が止まっていた。

「俺の親戚、なんかみんなスポーツやりまくってるんだよね」

明るく笑う電話の向こうに希望っていう光が射した気がした。

つづく

* 6 回裏 *

深夜 2 時を回ったとき、家の電話が鳴った。

「慎ちゃん？あのさー」

工藤透からの電話だった。

眠い目をこすり、応えた。

「明日さー、ブルペン来てくんねえ？いい？じゃ、おやすみ」

――何時？

聞くより先に電話を切られた。

翌朝。

電話で起こされた。

「今から学校に行くからよろしく」

時刻は午前 5 時半だった。

寝癖も直さずに学校へ向かう。

時刻は 6 時過ぎ。

なぜかブルペンの傍でラジオ体操が流れていた。

「さすが慎ちゃん」

「なに？」

「受けて？」

ブルペンの土を足でならしながら、透は言った。

「俺が？」

思わずずれた眼鏡を正して、聞いた。

「ミットはあるから。眼鏡のキャッチャーって最近流行りらしいよ」

習性か、思わず

「古田さんだけじゃん。しかももう引退したし」

と突っ込みを入れた慎二に、透は言った。

「慎ちゃん？ 蒸しパンって、焼くの？」

慎二は眠い頭で、だけど冷静に言った。

「焼くなよ」

つづく

* 7 回表 *

透は容赦なく投げ込む。

「ねえ？こっちのフォームとさ、」

強烈なストレートが運動オンチの慎二のミットに突き刺さる。

「こっちのフォームどっちがかっこいい？」

捕球することに必死で、だけど、使い込まれた宮本浩太に借りたミットは透のストレートを柔らかく包み込んだ。

「右」

あてずっぽうで答えた慎二に

「そっか、やっぱこっちか」

そう言って、一つ前よりさらにノビのある回転の鋭い球がミットに飛び込む。

「かまえてるだけでいいから」

そう言ったとおり、透のストレートは構えた場所に素直に届く。

「ねえ？こっちのフォームとさ、」

強烈なストレートが運動オンチの慎二のミットにまた突き刺さる。

「こっちのフォームどっちがかっこいい？」

目を見開いて、違いを探した。

グローブの角度。

つま先の上げるリズム。

わずかに、だけど、違った。

その違いの分だけ、ミットから伝わる振動が変わる。

後者の方がミットに対するおさまりがいい。――気がした。

「今投げたつま先あげるリズムほうが、良い気がする」

そう言った慎二の声に透は言った。

「慎ちゃんくらいだよ、あんなわずかな違い、見ててくれるの」

次の瞬間、透の手から離れたボールが鋭い軌跡で視界から消えた。

慎二の後方のネットを揺らす。

透がニヤリと笑って言った。

「スライダーについてきてくれるのは、やっぱ宮ちゃんか」

「ごめん」

慎二がそう呟いた。

地面に転がったボールを拾って透に返す。

透はグローブとボールを足元に置いて、言った。

「慎ちゃんさ、なんで俺ピッチャーやってると思う？」

「コントロール良いから？」

「まあ、それもあるけど」

慎二はしゃがんでミットを構える。

透はいつもよりゆっくりときれいなフォームをつくって、投げる真似をした。

慎二はその動きにあわせるように、ミットを閉じて捕球の真似をした。

「俺ね、」

透は言った。

「ピッチャー以外できないのよ」

「なんで？」

慎二は尋ねる。

「ダメなの。短気だから。自分以外が投げてるの想像するだけで、ウザイ」

「なんで？」

「だって、待ってるんだよ？そいつが投げんの」

透は今度はセットポジションの体勢になって。

「許せない。俺のタイミングでやりたい」

透は投げる真似をした。

慎二はミットを構えて、捕る真似をする。

透は言った。

「適材適所ってやつ。だから、慎ちゃんはスコアつける人がいいと思う」

その言葉が、なんか嬉しかった。

つづく

* 7 回裏 *

8月20日。

夏の日差しが続くその日。

捕手の宮本浩太も怪我から復帰した。

一塁を守る体格の大きな園田が「時々俺もキャッチャーやるから」と声をかけると、

二宮恵吾は「ダイエットしねえと、プロテクター入んねえだろ」と笑わせた。

その所為か、園田は三塁の守備練習を始めることになり、二宮は時々捕手を務めた。

そうやって、互いに心配していた気持ちをぶつけ合い、補い合いながらチームは進み始めた。

そんな気持ちになれたのも、たった一人の後輩の存在が大きかった。

8月25日。

「お、おねがいします」

山田小次郎が木村謙次郎を連れて帰ってきた。

「じゃあ、試しにやるか？」

と始めた内野ノック。

二遊間のコンビは一瞬で完成した。

従兄弟同士。それ以上にひとりの選手として木村謙次郎の守備は完成されていた。

その日ノックを打った栗本和則も「動き出しがいいよね」と自分には無いその軽快な身のこなしを絶賛した。

そうやって、チームに必要な人数がそろった。

だから、安心したのかもしれない。

練習メニューを全員で考えて、全員でこなして。

そうやって、チームに必要な環境もそろった。

だから、安心したかった。

けれど、ひとつ、最後の壁が立ち上がる。

「山下、ちょっと来い」

3年の学年主任が練習中のグラウンドに現れ、言った。

山下は、独りで行くのは不安だからと、慎二を誘った。

二人は職員室に向かう。

職員室のドアを開ける。

「学年主任の唐沢先生は？」と言いかけた山下より先に

クラス担任の遠藤直子先生が「先生、生徒指導室で待ってるって」と笑顔で言った。

――生徒指導室かよ……。

二人はそれほど長くないはずの廊下を歩いて、その扉の前に立った。

「慎二？ 入ったことある？ ここ？」

慎二は首を横に振った。

「あんの？」

そう尋ねた慎二に、山下は首を横に振った。

「失礼します」のその声がちょっとうわずった。

つづく

* 8回表 *

「大変だったんだからな！」

学年主任の唐沢先生は笑顔で言った。

「まあ、飲め」

そう言うと、二人分のスポーツドリンクを山下と慎二に差し出した。

生徒指導室はわりと狭い部屋で。

だけど、なぜかエアコンが効いていた。

「廃部の話だが、」

先生は冷静な口調で言った。

「お前らの卒業と合わせて廃部になるのは間違いない」

二人はその言葉を聴いてうつむいた。

「それまで、精一杯やりきれ」

二人は顔をあげた。

「2年の木村には転校の手続きのときに話はしておいた。覚悟はできてると言っていた」
唐沢先生は続けて言った。

「それと、野球部の顧問の話なんだが、遠藤先生の負担を軽くしてあげてくれ」

山下は尋ねた。

「どういう意味ですか？」

唐沢先生は言った。

「去年、先生が結婚したのは知ってるだろ？」

二人は頷いた。

「俺も今日知ったんだが、『おめでた』らしんだ」

「おめでたってなんですか？」

山下が尋ねる。

「おなかにこどもができたんだそうだ」

二人は顔を見合わせた。

「すごえ！」

「いつ生まれるんですか？」

「俺もそこまでは聞いてない。10ヶ月だから、来年の春くらいだろう」

唐沢先生は淡々と続ける。

「だから、年末あたりからお休みになる。だが、野球部の顧問に変更は無い」

二人は頷く。

「これまで以上に、お前たちだけでやれる限りのことはしてくれ、いいな」

二人は頷いた。

「それと、練習試合とかの連絡は俺が面倒みる。

練習試合は電車とかでいける範囲で考えておく。

遠征バスの手配とかも必要ならやるから安心してくれ。

それと田中、」

慎二は名前を呼ばれて思わず肩に力がはいった。

「お前は今までどおり、マネージャーとして全員を支えろ。約束だ。

相談があったら俺のところに來ること、いいな」

慎二は頷いた。

山下が微笑んだ。そして急に立ち上がると姿勢を正して深々と頭を下げた。

「唐沢先生、ありがとうございます」

唐沢先生はにっこり笑って言った。

「ったく、暑苦しいな、せっかくクーラーかけといたのに」

3人で笑った。

つづく

* 8 回裏 *

慎二は思い出していた。

約1年前にリスタートをきった野球部の思い出。

あの日と同じような空で、あの日と同じグラウンド。

もうすぐ、1年が過ぎようとしている。

目のまわりを真っ赤に染めた木村。

バラバラだった仲間が、今は、ひとつのチームになっている。

何を言うわけでもなく。

ただ、自分が何をすべきなのか、わかりきってる。

グラウンドに立つだけが野球じゃないと透が教えてくれたから、慎二は野球を好きになった。

運動オンチで打てない。守れない。走れない。

だけど、慎二の居場所はこのグラウンドにちゃんとあった。

ふたりは無言でキャッチボールを続けた。

慎二は3塁ベースのあたりに立ったままで。

木村はショートの手前位置のあたりまでゆっくりと距離をひろげていく。

そんなに遠くない距離で。

だけどそんなに近すぎない距離で。

ふたりは無言でキャッチボールを続ける。

慎二は急に遠くへ投げる。

木村が驚いて、だけど弧を描く白球を見上げていた。

パシッ。

軽やかなグローブの音が響いて、山田が笑った。

ちょうど二塁ベースの上でタッチプレーをしてみせる。

「ナイスボール！」

山田は木村に慣れた角度でボールを渡す。

二遊間の距離感は身体にしみついている。

受け取ったボールを木村は慎二に返球する。

そのボールを二宮恵吾の黒いグラブがさえぎった。

間髪いれず恵吾は木村にボールを返した。

その所為かキャッチボールにリズムが生まれてボールはいつの間にか四画に回る。

「へい！」

ズボンに土が付いた佐藤幸生が加わった。

呼ばれた木村は笑顔でボールを放り投げる。

幸生は受け取ったボールを右方向に放った。

ちょうどその場所に栗本と、一際大きなファーストミットをつけた園田が参加した。

「なんだよ、俺らもいれてよ！」

よく通る声を出して、宮本がキャッチャーミットをグーで叩いて鳴らす。

その隣で工藤透も両手を挙げてボールを呼んだ。

ボールはぐるりと全員に回る。

打ち合わせなんかいらぬ。

全員が程よい距離を保ちながら、四角はいつのまにか円形になっていく。

ボールを受け取った木村のところで、ボールの流れが止まった。

グローブをはめた左手。

その半そでの肩口で鼻を拭いた。

「俺、」

全員が木村の言葉を待った。

慎二は眼鏡を正しながら、みんなの顔を眺めていた。

みんな優しい表情をして、木村の言葉を待っていた。

「俺も、最後の夏なんす」

震える声に、だけど、ちゃんとみんなに届く声で。

「だから、野球部は終わりになっちゃいます。ごめんなさい」

そこから二度、鼻をすすって、右手に握り締めた泥だらけの使い込まれたボールを見つめて言った。

「続けらんなくて、ごめんなさい」

木村は頭を下げた。

空が夕焼け色に染まっていく。

木村はまた泣いていた。

肩を震わせて、我慢しようと必死で。

だけどあふれてくるその涙が止まらなかった。

「キム！」

彼の名を呼んだ。

山下信吾は、もう一度名前を呼んだ。

「きむらー」

両肩の袖口で涙を拭いて、木村はボールを山下に投げた。

少しだけ逸れて、だけどちゃんと追いついて、山下は

「ナイスボール！」

その声を返した。

ボールは3年生をぐるりと回って、また山下のところにもどってくる。

何度も拭いたその目のまわりを真っ赤にして、木村は両手をあげて、

ボールを呼んだ。

「山さん！」

山下の手を離れたボールはきれいな弧を描いて木村が胸元に構えたグラブにおさまった。

木村は崩れ落ちるように泣き始めた。

全員が駆け寄る。

たった一人の後輩に、9人の仲間たちが思い思いに言葉をかける。

慎二は言った。

「いい試合しよう」

全員の気持ちはずっとひとつだった。

だけど、今日やっと、それをグラウンドで確信できた気がした。

つづく

* 9 回表 *

開会式。その球場での第3試合。

両チームとも2塁までの進塁は許すも、拮抗した緊張感のある試合展開だった。

佐藤幸生が言った。

「勝てるかもね、この試合」

慎二は手元のスコアブックに並んだ0の文字を見つめた。

内容は悪くない。

でも、3塁が遠い。

5回の裏、バックスクリーンに赤色のランプが1つ灯る。1アウト。

慎二は勤めて明るく言った。

「うちの一番が3塁まで走れば勝てる」

幸生はその言葉に無言で微笑んでバッターボックスへ向かった。

慎二はひとつだけ不安に思うことがあった。

4回まで無失点。

5回表になって、透の内容がボール先行ぎみになった。

●で塗りつぶす回数が少しだけ気になった。

「透？」

隣に座って冷えたドリンクを飲んでいた透はじっと相手ピッチャーを見つめたままで言った。

「慎ちゃん、どうせアレでしょ？」

「なに？」

「ボールが先行してるって言いたいんでしょ？」

「うん」

慎二は素直に頷いた。

「なんか、あの試合球さ、スライダーかかりすぎるんだよ」

その瞬間、佐藤幸生のバットが快音を立てた。

打球は右中間を転々と転がっていく。

幸生は俊足を生かして一気に2塁ベースを蹴って3塁へ向かう。

外野からの送球が少しそれて、幸生は3塁ベースに到達した。

試合が大きく動いた。スタンドから歓声が響く。

全員がベンチで立ち上がった。

打席には2番、山田小次郎。

打席に近づき、3度素振りをする。3度屈伸をして、左打席に入りバットを構えた。

1球目、ストレート外郭にボール。

2球目、外に大きく曲がるカーブ。

キャッチャーが3塁ランナーを気にする。

幸生は一瞬も動かない。

3球目、投球モーションと同時に3塁ランナーの幸生がスタートをきった、山田はバントの構えに切り替える。

――スクイズ

バットの鈍い音がして、フェアグラウンドにボールが転がる。

3塁手が転がったボールを右手でひろい、ホームに投げる。

幸生が頭からスライディングで飛び込む。

キャッチャーがボールを捕球する。

一瞬だった。

球場が静まり返る。

ホームベースに土煙が舞う。

主審の音が響く。

――アウト

土煙が静かに風で流れる。

幸生の左手の指先がほんの数センチホームベースに届かなかった。

後続もヒットらしいヒットが出ず攻撃を終える。

慎二のスコアブックにもうひとつ、0が並んだ。

「いいチャンスだったけどね」

透は笑ってマウンドに走っていく。

だけどその右手の手首に慎二の知らないテーピングが増えていた。

つづく

最終回

8回表。2アウト。

「ボールファー」

主審の音がグラウンドに響く。

これまでノーヒットだった9番打者を歩かせた。

この試合初の四球。

キャッチャーの宮本が大きく声を上げた。

「2アウト！2アウト！」

透が額の汗を拭う。

相手の打順は今日4度目の1番打者へ。

今日、2本のヒットを打っている。

けれど――、

スタジアムにアナウンスが響く

――代打。

左打席に大柄な選手が入る。

慎二はスコアブックの隣に置いた、ノートをめくる。

嫌な予感がした。

宮本がベンチに目をやる。

けれど、慎二のノートが風の所為でうまくめくれない。

一瞬遅れた。

宮本は透にサインをだす。

頷く透。

慎二は呟いた。

「ここでレギュラーの6番かよ」

慎二は立ち上がった。

けれど、透の投げたスライダー。

快音が響く。

打球はレフトスタンドに放物線を描く。

慎二は前のめりになって打球の行方を追った。

レフトを守る栗本の頭のはるか上を通り過ぎた。

球場が歓声に包まれる。

バックスクリーンに、あっけなく 2 の文字が刻まれた。

相手チームは3人目の投手を出してきた。

ストレートと変化球が3種類。優秀な投手だった。

打順は8番の宮本浩太、9番木村謙次郎と続く。

宮本は打球を外野まで運ぶも、センターライナー。

9番木村は振り遅れの力無いセカンドゴロに倒れた。

9回裏、2アウト。

佐藤幸生はかぶっていたヘルメットを脱いで、主審に告げた。

――代打で、お願いします。

幸生が走ってベンチに戻ってくる。

バックスクリーンにPHの文字。

「アナウンスが告げる1番センター佐藤幸生くんに代わりまして、代打、田中慎二くん」
主将の山下信吾がバットとヘルメットを差し出した。

「でも、俺、」

振り向くと、全員が頷いた。

二宮恵吾が言った。

「お前なら、何を待つよ？」

慎二は言った。

「3球目、ストライクを取りに来ると真ん中のストレート」

慎二はバットとヘルメットを受け取り、慣れない手つきでヘルメットを被り駆けていった。

全員がベンチから声を送る。

背番号の10。

高校最後。10番目に打席に立った。

1球目、アウトコースにストレート。ボール。

2球目、アウトコース。同じようなコースからスライダー。変化してけれどボール。

慎二はバットを強く握り締めて構えた。

3球目、インコースに捕手が構える。

少しだけずれてど真ん中にストレートが入ってくる。

慎二は力いっぱいバットを振った。

ボールなんか見てなかったのかもしれない、だけど必死で振りぬいた。

バットが快音を立てる。

白球は黒土のグラウンドに転がった。

――僕らの夏が終わる。

慎二はあふれてくる涙を拭いもせずに、ただ一塁に走った。

背番号10は一塁ベースに頭から滑り込む。

運動オンチの精一杯は、ぼてぼてのショートゴロ。

一塁の審判が右手を上げて、アウト！と言った。

全員で整列する。互いに礼をする。

ゲームセット。試合終了。2-0。

たった10人の野球部は、全員がユニフォームを泥だらけにして戦い抜いた。

――僕らの夏が終わった。

-END?-

祝勝会

僕はそれをなんとなく『祝勝会』と呼んだ。

山下が椅子から立ち上がると挨拶っぽいものをした。

「えーっと、あいさつっぽいことをね、用意してきたんだけど、
なんか、すでに良いにおいがしてくるので、短めに」

山下は一度軽く頭をさげた。

「保護者のみなさん、僕らに野球をやらせてくださってありがとうございました。
最後の大会にも出場することができましたし、選手全員が打席に、」

山下はチラッと横目で僕の方を見て、続ける。

「立てたことを、僕はとても嬉しく思います。

それと、今日、こうやって野球部全員で、焼肉とか食べられるのも、ホント嬉しいです。

園田のおっちゃん、焼肉屋さんをやってってくれてありがとうございました」

園田の父親が、調理場のそばに立って恥ずかしそうに頭を掻いた。

山下はひとつ咳払いをすると、

「それと遠藤先生、おめでとうございます。

赤ちゃんも春に無事生まれて、夏の大会も応援に来てくれてありがとうございました。

先生が顧問をやってくれて、本当にうれしかったです。」

遠藤直子が保護者に向かって頭を下げた。

山下はウーロン茶の入ったジョッキを持つと、

「じゃ、なんか長くなっちゃいました。用意はいいですか？」

すると全員がコップを持つ。

野球部最後の『祝勝会』。

もう二度と使われることの無い背番号。 みんなで互いに縫い付けあったユニフォーム。

それが僕らの宝物になる。

僕はみんな笑顔だった。

山下は一際大きな声を張り上げ、言った。

「みんなありがとう！かんぱい！」